

学内研究組織（2024年度）

研究課題：「フランス、ベルギー、カナダのミュージアムにおける「共生」を目的とした言語教育活動」

モントリオールの市民ミュージアムにおける 「共生」を目的としたフランス語教育活動

Francisation Activities for Intercultural Coexistence in Montreal's Citizen Museums

今中 舞衣子 (Imanaka Maiko)

ミュージアムは収集、保存、調査研究、展示など様々な機能を持った施設であるが、それに加え教育普及を担う機関という側面を持っている。近年では講演会や上映会、一方的なガイドツアーなどの情報提供だけでなく、ワークショップなど参加型のプログラムも提供されるようになってきた。その中で、主に移民などの非母語話者を対象とした言語教育活動についての研究も見られるようになってきている。

ミュージアムにおける言語教育の取り組みの中でも筆者はとりわけ、市民ミュージアムにおけるフランス語教育活動に着目した。「Musée Citoyen」（市民ミュージアム）という概念は、1970年代以降に広まった「Nouvelle muséologie」（新しい博物館学）の流れの中に位置づけられる。従来の博物館が芸術作品を展示するエリート主義的な施設であったのに対し、新しい博物館学は社会や地域の人々との関係を重視し、社会に奉仕する機関としての博物館を再定義していった。

本研究の目的は、市民ミュージアムが地域における多様な文化的背景を持つ人々の共生を目的としたフランス語教育でどのようなテーマを扱い、どのような形式の活動を通じて博物館の理念や役割と教育活動を結びつけているのかを明らかにすることである。事例として、カナダのケベック州モントリオールにある3つのミュージアム（Musée McCord Stewart、MEM - Centre des mémoires montréalaises、Écomusée du fier monde）におけるフランス語教育活動をとりあげ調査した。結果として、事例となったミュージアムが、先住民、移民、労働者階級などの社会的マイノリティの歴史や個人の物語をテーマとしてとりあげたフランス語教育活動を実施し、参加者どうしの対話を誘発するような活動を提案することで、多様な背景を持つ人々の共生に寄与することをめざしていることが明らかになった。また、新しく地域にやって来てミュージアムを訪れる人々が、周縁的な存在として学ぶ・教わる立場にとどまり続けるのではなく、自らが情報源となって個人の歴史／物語をミュージアムに提供し、展示や企画そのものに関わる存在としてミュージアムの活動に加わっていくケースも見られた。これは、「文化」へのアクセスが困難であった人々が、ミュージアムでのフランス語学習活動への参加を一つの契機として地域コミュニティと関わり、自ら「文化」の担い手になっていくプロセスであったと言える。

【口頭発表】

今中舞衣子 (2025) 「モントリオールの市民ミュージアムにおける共生を目的としたフランス語教育活動」 言語文化教育研究学会 (ALCE) 第 13 回研究集会、早稲田大学、2025 年 8 月 30 日.

【論文】

今中舞衣子 (2025) 「モントリオールの市民ミュージアムにおける共生を目的としたフランス語教育活動」『大阪産業大学論集 人文・社会科学編』 54 号、pp.73-92、2025 年 11 月.